

## ふたつの国の永遠のつながり

林 志 宣

京都から帰って既に三年もたってしまったとは信じられません。ここソウルで桜の花や色とりどりの葉を見るたびに、日文研の風景が私の心で重なります。

日文研生活では作曲に集中することができたうえ、京都で「カオスモス [Chaosmos]」「不可能な可能性 [Impossible Possibility]」東京で「生の永遠の歌 [Perpetual Song of Life]」を初演する機会を得ました。そして帰国後に出版する『映画のなかの現代音楽』の執筆に多くの時間を割くことができました。拙著は二〇一四年に出版され、韓国の出版財団の「世宗図書館学術部門」でノミネートされたのは嬉しいことです。日韓の関係をただ一人の個人的経験に還元することを望みませんが、両国間で交換コンサートを催すことをずっと探っていて、二〇一五年は私の願いを実現するのに完璧なタイミングでした。その年は日韓外交関係樹立五〇周年にあたっていたのです。

新作を朝鮮通信使のコンセプトで作曲しようと思いつきました。それは日文研滞在中のふたつの体験にもとづきます。第一に、京都で娘とドキュメンタリー映画『最初の朝鮮通信使李藝(イ・イェジ)』を見ました。そこに描かれた両国の良好な関係を保とうとする両国の人々の努力に印象づけられました。一五世紀より一九世紀初頭まで朝鮮通信使は現在のソウルから京都まで二〇〇〇キロにわたる長い旅を行い、二〇〇〇人以上の間人や馬の大行列が両国で図版や

文書に記録されています。彼らは進んだ文化を日本側に伝え、日本側は一行を実に温かく、心から歓待しました。音楽と踊りは一行の長旅の疲れを癒し、日本の宿主はすばらしい食事と見物で彼らを慰めました。第二に、京都近くの小さな祭りで元中学校長に出会い、彼は遠い昔、日本に進んだ文化を伝えようとした朝鮮人にどれほど感謝しているかを私に語りました。彼はそれを素晴らしい将来に結びつけようとしていました。この二つの刺激から朝鮮通信使を記念する作品が構想されました。

私が作曲家として委嘱を受けた画音室内管弦楽団と、京都市立芸術大学の中村典子准教授は、朝鮮通信使を記念する特別なコンサートを企画し、私は音による想像上の通信使の旅を描写した『朝鮮通信使の散らばった記憶との邂逅 Encounter with the Scattered Memory: Choson Tonginsa』を初演しました。かつて両国で共有され愛された旧来の習慣、文化、芸術を象徴するため、その古い響きを伝える伝統楽器の笙（笙篁）を用い、作品は四つの空想の情景を描いています。朝鮮王と通信使の面会と一行の釜山への陸路の移動の情景、瀬戸内海経由の波間の旅と上陸して京都に到着するまでの情景、安全な上陸後の休息と娯楽の情景、そして最後にほぼ九カ月の旅をしめくくる京都から江戸までの壮麗極まりない行列の情景、この四景です。

中村典子さんはそれに対して、同じコンサートで新作『海煥草木川花奏鳴』を初演しました。それは一九四五年、日本で獄死した韓国の詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）に寄せられています。彼はわずか二七年生きた後に、韓国人の心に今でも残る美しい詩を多く書きました。彼の非暴力の抵抗は日本人にも強い印象を残したに違いなく、中村さんはプログラムに書いています。

海煥(司晷)は、韓国の国民的詩人尹東柱の号である。尹東柱は中国満洲に生まれ、幼い頃、海煥と呼ばれていた。彼は平壤、ソウル、東京、そして京都の同志社大学で学んだ。彼は詩を韓国語で書いていて、そして逮捕され、第二次世界大戦の終わる前に、福岡で二七歳で亡くなった。その時、彼の母国語である韓国語は西洋植民地国家の如く、大日本帝国によって禁じられていた。彼は私達の先祖の、力の信奉者によって死に運ばれ、帝国主義者と全体主義者が彼の生命を奪った。しかしながら、彼のメッセージは永遠に生きている。私はすべての草や樹や川や花の声の中にある彼の精神をいつも感じ、彼の光は私やあなたや私達そしてあらん限りのすべてを、海と天より包容する。

アジア起源の弦楽と、天からの光を表す竹のマウスリードオルガンの日本伝統楽器器笙が、宇宙すべてのそれぞれの場所で、絶え間なく会話する。

二〇一七年は尹東柱の生誕百周年にあたり、延世大学の尹東柱記念事業会は五月一八日に構内のクムホ芸術センターで、それを祝う特別コンサートを企画します。『海煥草木川花奏鳴』は詩人と密接に結び合っているのです。作曲者と笙の奏者真鍋尚之氏を招き、延世シンフォニーエッタによって初演されます。私はこの特別な機会のため、尹の人生と詩にヒントを得た新作、ヴィオラ協奏曲『新しい路 New Paths』を書き終えたばかりです。二一世紀になってもお両国間の社会的な摩擦は続きますが、このコンサートは傷ついた人々を慰め、両国民の平和的な共存を助けるという意味で意味深いと確信しています。尹東柱の人生の痕跡が日中韓の三国にまたがっていることを思うと、日韓のみならず中国を含めた東アジアの平和と発展の価値を広げるのに、彼は良きアイコンとなるに違いありません。

数日前、かつて日文研客員教授だったこともある兄で歴史家の林志弦（リン・ジュヒュン）と話しました。兄は次の研究休暇の計画のことを話し、二人で日文研の非常に静かな私生活と学術的な業績について懐かしがりました。果たして日文研に帰るかどうかは確かではありませんが、京都と日文研が兄にも決して忘れようのない良き思い出を与えてくれたことは間違いありません。

三〇周年、おめでとうございます！

（延世大学教授）

原文・英語

翻訳・細川周平（国際日本文化研究センター教授）